田園調布学園大学

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学　　長　殿

7年 6月　24日

年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

学科、委員会等：共生社会学科

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

該当番号 対象の取組

2	初年次教育

申請（代表）者：小山望　藤原亮一 印

1.取組の名称

共生社会について肯定的な意識や態度を醸成する初年度インクルーシブ教育の検討

2.取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを〇で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	

3.取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

共生社会学科を含むすべての学部学科の教員に呼びかけ、『共生を考える』という研究会を４月に立ち上げた。５月３０日、６月２７日と２回の研究会を経て、初年次インクルーシブ教育に寄与する図書の出版を決定した。執筆予定の教員は、共生社会学科、社会福祉学科、こども教育学科、心理学科の全ての学科教員が加わり１０名を超えた。その後は、月例の研究会を開催し、活発な報告と質疑応答が行われ、その成果は『共生を考える』というタイトルの図書の出版にいたった。

4.取組の成果

取組の成果は、共生社会学科の令和７年度の１年生新カリにおける必修科目「共生マインド実践講座」を担当する江島、藤原、小山の３名が積極的に研究会に参加し、図書『共生を考える』の執筆にも加わったことにより、初年次の共生マインド醸成教育に貢献したことである。また、社会福祉学科やこども教育学科の教員が当該研究会に参加したことは、各学科の各々が掲げるマインド養成の初年次教育に貢献するものと考える。

5. 課題・問題点

課題・問題点としては、教育改善事業の主要成果を研究会の活動ならびに図書の出版に求めたことにより、当初のスケジュール計画に遅れが生じたことである。また、研究会には参加したものの執筆予定であった複数の教員が辞退したことも問題として反省すべき点であると考える。

6.自己評価

全学的な共生社会の研究会を発足させたこと、その成果を図書出版したことは評価に値する。また6月にインクルーシブ教育推進校の県立湘南台高校を訪問、9月に大阪の豊中市立南大塚小学校を訪問し、校長はじめ担当教員に聴取意見交換を実施したことは、将来の本学インクルーシブ教育を考えるに益があった。そして10月には本学共催の日本共生社会推進協会「共生社会フォーラム2024」にてインクルーシブ教育校卒業生の共生学科1年生2名を登壇させ、小山がコメンテーター役、藤原が司会役で本学の高大連携インクルーシブ教育の現状を報告したことは評価できる。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

共生社会研究会については、『共生社会を考える』執筆者を中心に、次年度も継続して取り組みを行っていく。成果の図書である『共生を考える』は3月の出版になったため、4月からの共生マインド実践講座など初年次教育科目の教材として採用することはできなかった。来年度以降にテキストとしての採用を検討したい。また社会学科、こども教育学科、心理学科の各々のマインド醸成にも役立てて行きたい。

田園調布学園大学

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

受付

学　　長　殿

2025　年　5　月　29　日

年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

学科、委員会等：共生社会、図書・紀要委員会

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

該当番号 対象の取組

⑧	FD、SD の充実

申請（代表）者：國見真理子　　印

1.取組の名称

グローバルな教育研究活動を通じた本学のグローカル教育の促進

2.取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを○で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

（個人）	組織	國見真理子（ただし、図書・紀要委員会との協力を含む）

3.取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

市民社会に関する国際学会での研究報告や大学院生へのチューター活動（7 月），グローカルな市民活動に関する学会参加（6, 9 月）そして国内外学会誌での研究成果発表によって対外的貢献を行った。活動で得られた知見については，生田学長（当時），米山副学長（当時）そして黒田心理学科長のご協力の下，学内の研究の質向上を図るため，図書・紀要委員会による自主 FD 研修会として，国際学会に関するワークショップを通じて共有した。具体的には，主催側責任者として各種調整・準備を行うと共にスピーカーとして自らの国際学会活動の経験を発表することで，学内に向けて成果還元を行った(2 月)。また，研究活動を通じて知己を得た非営利組織がグローカルな視点で地域貢献活動を実践していることもあり，活動に興味を感じた本学学生の当該組織へのインターンシップ活動参加に向けた助言・支援を行った(3 月)。

4.　取組の成果

国際学会参加を通じて，イスラエルとパレスティナそしてアフガニスタンといった紛争地域の当事者との対話を行う機会を得たことで，国際的視点や社会課題への多角的理解を深めることができた。国際学会活動を通じて得た知見を加えた上で，国内外の学会誌への研究論文投稿等の研究活動を進展させることができた。学内では国際学会に関するワークショップを主催し，グローバルな研究活動の促進を目指した教職員同士の知的交流を実践することができた。また，非営利組織の地域連携を巡る訪問調査の関連活動として，外国籍学生のインターンシッププログラム開発の助言・支援することができた。

5.　課題・問題点

急激な為替変動やインフレ,戦争・災害などの影響で在外研究の活動環境が厳しくなっている。本学では研究費の制約や在外研究支援制度の不足,専門職養成校としての巡回等の多忙な業務も相まって,教職員の在外研究活動の機会は極めて限定されている現状がある。他方,日本社会では少子高齢化による人手不足を背景に外国人労働者需要の高まりや住民の多様化が進行し,近年は本学学生の多国籍化も進んでいる。そのため,国際的視点からの教育・研究の重要性やニーズは本学においても高まっている一方,他方では在外研究活動の機会を持つことが以前よりも難しくなってきているという課題が明らかになった。

6.自己評価

国際学会への参加や研究発表を通じて,人々の安寧な暮らしのためには市民社会の発展が重要であることを痛感したが，それは他国の研究者と共通の問題意識であることが改めて認識・共有できた。学会会場であったヨーロッパで深刻になりつつある移民問題に関する理解を深めることができた。国際学会発表は,本学でも必要性の高まっている国際的視点からの教育研究活動を円滑に遂行するために良い刺激となった。その際，日本人として，日本社会の現状を海外に対して正確に発信する必要性を再認識した。そこで，来年度以降も国際学会発表を継続して行う決断をすることができた。また,本学では初の試みであった国際学会に関するワークショップでは,各教職員の専門性を活かした協力体制が構築され,限られた人的資源にもかかわらず大きなシナジー効果が得られた。更に,外部の非営利組織の協力の下で実施された学生インターンシッププログラム開発への協力は,最終的に学生に対する教育の質や学生自身の就職意欲向上につなげることができた。

7. 今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

図書・紀要委員会の協力の下,初めて実施したワークショップは参加者から非常に好評であり,研究活動促進に有意義であることが確認された。そのため,今後も定期的にこのような研修活動を実施していく方針が本委員会の事業計画に盛り込まれることになった。個人的には,ワークショップを通じて,参加してくださった多くの先生方から貴重なご意見をいただき,今後の継続的な国際学会発表に対する意欲を高めることができた。更に,本学の教育の質向上方策の一環として,グローカルな活動を行う非営利組織でのインターンシッププログラム開発に今後も協力していくことにつながった。

科目	品名又は使途	内容（数量等）	金額（千円）	支出時期
教育研究経費				
	会議費	学会参加	21,000	6,9月
	報委手数料	英文校正	22,167	12 月
	旅費交通費	学会参加・調査	226,733	6.7.9,3 月
		小計	269,900	
教育研究用機器備品支出				
	なし			
		小計	0	
図書支出				
	なし			
		小計	0	

処理	学　長	副学長	副学長	学部長	学部長	事務局長	学科長

田園調布学園大学

受付

学　　長　殿

2025 年 5 月 2 6 日

２０２４年度 教育改善事業に係る取組の実績報告書

標記の件について、採択された取組の実績を以下のとおり報告します。

○教育改善事業の対象となった取組（公募要領）

該当番号 対象の取組

④	アクティブラーニングなど学生の主体的・能動的な学修態度を養う教育

学科、委員会等：共生社会学科

申請（代表）者：引馬　知子　印

1 取組の名称

共生社会の創造と社会・環境の調和を主体的に学ぶプロジェクト

2．取組の実施単位（「個人」、「組織」のいずれかを〇で囲み、「組織」単位の場合は組織の名称を記入してください。）

個人	組織	引馬知子、江島尚俊、國見真理子

3．取組実績の概要（実施スケジュールを含む）

（國見）SDGS 目標と地域社会・環境との調和のあり方を学ぶため、前期中に事前学習を行い、登戸研究所資料館への訪問調査（9 月）、地域連携に取り組む非営利組織への訪問調査（10 月）やセミナー参加（11 月）を実施した。最終的にレポート作成及び報告会を通じて学びを振り返った（1 月）。
（江島）以下の計 5 回の施設見学・インタビュー調査、ならびに調査報告会を行った。3 年＝6 月：社会福祉法人横浜家庭学園、11 月：国立武蔵野学院児童自立支援施設。4 年＝6 月：社会福祉法人厚生館福祉会かわさき里親支援センターさくら、7 月：新日本学園、10 月：学習支援施設コペルプラス。3・4 年合同＝1 月：ゼミ内での調査報告会。
（引馬）障害者や高齢者と共につくる地域カフェ活動を実施し、共生社会実践活動の報告を神奈川県の催しにおいて行った。8 月に高齢者施設でカフェを実施、11 月に大学で障害者の生活介護施設とカフェ活動を行い、1 月にダイアログ型の共生社会ワークショップに学生と教員で参加し、学びを深めた。これらために 4 月より 3，4 年生のゼミ生を中心に準備し、そのなかで障害のある人たちと創作活動の継続的な実施や、高齢者施設等の専門職の方々と活動実現に向けた検討等を進めた。

4．取組の成果

（國見）調べ学習と訪問調査を組み合わせながら SDGs 目標への理解を深めた。現地への訪問は社会的視野を広げる貴重な機会となった。SDGs 目標と共生社会実現に向けた地域での現状を学習することへの遣り甲斐や意欲を高めることができた。
（江島）各回の訪問調査において、インタビュー項目を設定した上で聞き取りを行い、調査後には御礼文書発送、文字起こし、調査報告資料の作成を行った。特に、学生にとっては社会調査（質的調査）自体が初めての体験であったため、貴重な取り組みとなった。

（引馬）学生が主体的に障害者の生活介護施設や高齢者施設等の専門家と連絡を取り合い、活動の目的や内容を相談するなかで企画が実現した。高齢者に食べやすい食を調べたり、調理スタッフから指導を受けたり、実際に高齢者や障害者の方々と交流するなかで、学生たちが考えたこと形となっていき、学生が多くを学んだと感じたことが一番の成果である。また成果を公の場で発表した。

5. 課題・問題点

（國見）事前学習に対する意欲は高かったが、学生間に学力や関心に差があり調査の質にばらつきが生じたので、事前学習をより丁寧に行ってから訪問調査に赴くよう心掛ける。
（江島）学生に対してインタビュー調査のトレーニングを入念に行ったため、インタビュー自体は問題なく行うことができた。その一歩で、発表会に向けての資料作りや分析・考察に非常に時間を有してしまった。次回以降の課題としたい。
（引馬）学生たちが連絡や相談を互いに密にして取組を進め、それぞれが目的意識をもって役割を発揮したため大きな課題はなかった。一方で、構想を実現し成果をまとめるまでには、互いへの期待や参加状況等について再調整がいる場合もあり、それを乗り越えることも重要な学びとなった。

6.自己評価

（國見）訪問調査によって学生の能動的な学びが促進された。事前学習や報告会を通じた学年同士の学び合いは、学生自身の探究学習に対する成功体験や社会課題への理解・関心を深める貴重な経験となった。
（江島）教員引率、学生単独を含めて計５回の訪問調査、ならびに３・４年ゼミの合同報告会を実施することができた。特に、国内唯一の国立かつ少年を対象としている国立武蔵野学院での調査を行うことができたことは、学生間での成功体験としても大きな成果であり、ゼミ内発表会において様々な気づき・発見があったが報告された。
（引馬）学生たちが主体的に学外の多様な人々と交わりながら、共生社会の創造に貢献する取り組み内容を、自らが描き実現したこと、その過程で専門的な調査、企画、実施等を仲間や専門家と協働して行ったこと、さらに成果をまとめて公の場で発表したことが評価できる。学生たちは総合的に力をつけ、これらは自己の肯定的な評価、卒後の各自の方向性の検討にもよい影響を与えた。

7.今後の予定（取組成果の活用方法や取組実績の分析・検証、課題・問題点の対策等）

（國見）上級生を中心に昨年度の調査で得た知見を共有し、下級生の調査に対する関心を高めるように心掛ける。調査で得た成果のフィードバックを通じて学内に還元していく。学生の自発的に学ぶ姿勢を育むため、教員が適宜助言・指導を行っていく。
（江島）今回の調査報告会資料を印刷・製本した上で、保管管理をしていく。なお、インタビュー調査上における学生の問題点については、次年度におけるゼミ内指導を通して改善していきたい。
（引馬）これまでに取り組みを一緒に行った高齢者や障害者の施設や組織との関係性が継続するようになっており、また、上級生が活動を通じて学んだ内容や専門性、実践過程等が下級生に引き継がれている。それらを活かして、また改善しつつ、積み上げのある取り組みを行っていく。